

いづい こずえ

○岩井 梢 (九州大学大学院) 藤好末陶 (福岡歯科大学口腔保健学)

壺井一彰 中村謙台 (NPO 法人ウェルビーイング)

【はじめに】

2000 年 4 月に厚生労働省の打ち出した「21 世紀における国民健康づくり運動 (健康日本 21)」において、その基盤にあるのはヘルスプロモーションの理念である。この施策は、住民が主役であるというヘルスプロモーションの基本理念に基づき、あらゆる計画の決定プロセスに住民が参加することが謳われている。その計画策定の手法については厚生省によって紹介されているものの¹⁾、地方計画においてどの手法を選択するかは市町村の独自性に任せられている。

今回の「健康日本 21」の地方計画は、従来の政策のように国家の一律的な方針にのっとった計画書を担当者のみで作るものではない。地域の実情に応じた計画策定を目指し、計画策定の初期段階から、住民や関連団体との連携を取りながら協働して作りあげていく計画である。地方計画の策定担当者はこれまであまり経験したことのない方法であるため、第三者の支援を必要とする事例が多く見られる。そこで、本報告は、第三者として住民参加の手法を取り入れた「健康日本 21」の地方計画の策定を支援した立場から、計画策定のプロセスを分析・評価することを目的とする。

【方法】**1. 対象**

分析の対象となった事例は、NPO 法人ウェルビーイング (以下、W-B) が、平成 13 年度より「健康日本 21」の地方計画策定の支援を行った 4 地域 (1 市 3 町) である。計画策定の支援を行っている W-B は、ヘルスプロモーションの理念に基づき、あらゆるプロセスに住民が参加することを重視した計画策定の支援を行っている団体である。

2. 調査方法および内容

平成 13 年 4 月 1 日から平成 14 年 3 月 31 日の 4 地域の会議記録 (打ち合わせ記録、各種協議会・作業記録、反省会記録、観察記録) と W-B との連絡記録 (電話、E-mail、Fax) を分析の対象とした。今回、対象地域の概要とデータ数は表 1 に示す通りである。これら 4 地域の記述録を共同研究者の 4 名によって、市町の計画策定の担当者 (保健婦) や協議会・庁内ワーキンググループの参加者の発言または態度、及び大きな変化の起こった出来事に注目し、記述録のコーディングを行い、分析した。コーディングは直感的にそのときに思いついた言葉を使ってコードを随時ポストイットで抜き出すオープン・コーディングを行い、それらを時系列に配置し、推進体制のできあがっていく枠組みをつくりあげていった²⁾。

表1 対象地域の特徴と分析データについて

	人口規模	取り組む世代	会議記録 (ページ数)	連絡記録
A町	人口 9,272人	中壮年期	15 (88ページ)	9
B町	人口 5,901人	乳幼児～学童	12 (195ページ)	44
C町	人口 15,807人	中壮年期	17 (75ページ)	23
D市	人口 33,579人	乳幼児 (う触)	12 (93ページ)	10

【結果】

計画の策定に関わる人・組織と、プロセスの変化をまとめると表2のようになった。そして、第三者として関わる W-B は場面や状況に応じて必要な情報の提供やアドバイスを行っている。計画策定のための組織形態・立ち上げの時期などは市町の規模・取り組む課題によって異なるが、いずれの地域も担当者は当初不安をもっていた。しかし、庁内の関係者、あるいは住民との協働作業を通して、徐々に計画の推進体制ができつつある。その過程では、担当者の考え方や行動の変化、策定委員会や庁内ワーキンググループ (以下、庁内 WG) のメンバーの反応など様々要素が連動し、浮き沈みの繰り返しも観察された。

表2 計画策定の関係した人・組織とプロセスでの大まかな変化

	A町	B町	C町	D市
関係した人・組織	計画策定の中心となる担当者 (保健婦)、事務局 (担当課)、策定委員会 (住民)、庁内 WG (健康日本 21 の実行に関連する他課のスタッフ)	計画策定の中心となる担当者 (保健婦)、事務局 (担当課)、策定委員会 (住民)	計画策定の中心となる担当者 (保健婦)、事務局 (担当課)、策定委員会 (住民)、庁内 WG (健康日本 21 の実行に関連する他課のスタッフ)	計画策定の中心となる担当者 (保健婦)、事務局 (担当課)、策定委員会 (住民、専門家；歯科医師)
プロセスにおける変化の概要	担当者は当初既存の事業への不満や新たな取り組みへの不安を持っていたが、初期段階で庁内 WG を立ち上げ、庁内 WG での自主的な動き、前向きな態度、一体感が生まれ計画推進のための体制ができつつある。また、策定委員会を平成 13 度末に立ち上げ、今後住民との計画を一緒に作っていく体制づくりを行っている。	担当者は当初既存の事業への不満を持って始めたが、初期の段階で策定委員会を立ち上げ住民の意見を聞くことで、手応えや住民への働きかけの意欲がわいている。また、住民も自分の意見を言い、少しずつ計画ができていく中で、共有感や様々なアイデアが出され、自主的な動きや保健婦との信頼関係も作られつつある。	庁内 WG を初期段階で立ち上げ、当初スムーズに進んでいたが、連絡調整がうまくいかずに一時期庁内 WG のメンバーが減ったこともあった。しかし、住民との策定委員会が立ち上がり、住民との共同作業を行うようになってからは、庁内 WG のメンバーの参加も増え、活発になりつつある。	担当者は当初住民に計画策定を任せることへの不安をもっていたが、計画策定の初期の段階に策定委員会を立ち上げた。計画の目標を住民と決定していく過程のなかで、住民の力に気づき協力する姿勢が生まれてきた。また、行政・住民・専門家の 3 者で計画策定を行うことで、専門家との協力の体制もとれるようになった。

【参考文献】

- 1) 厚生省・財団法人健康・体力づくり事業財団 . 地域における健康日本 21 実践の手引き, 2000.
- 2) 佐藤郁哉. フィールドワークの技法. 新曜社, 2002 : 321-322.